

tam tam

2023.01

VOL. 20

P1 [特集]
「これまで」と「これから」の3年

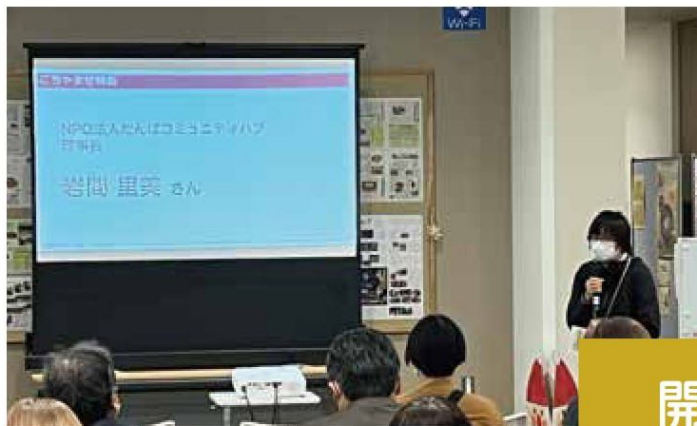
P2 [特集]それぞれが見た3年
成果・課題から次の3年で目指すこと

P3 隣の自治協さん「佐治地域自治協議会」
丹波市民、学びの窓「『他出子』という存在」

P4 繋ぐ!市民活動「関西丹波市郷友会」
活動事業者紹介「マイファーム」

SPECIAL FEATURE

今号の特集 「これまで」と「これから」の3年



開設
3周年



2022年10月、市民活動支援センターは開設から3年を迎えました。「市民一人ひとりが輝き活躍できるまちづくり」を理念に、「みんなでつくる・育てる」「ごちゃまぜ」を施設運営コンセプトとし、「住み慣れたまちに住み続けられる暮らしを実現するための地域づくり」に向けた支援を行ってきました。

この3年で着実に利用は増え、現在では月平均で約1,000人の来館者があり、約100件の窓口での相談対応や情報提供等を行っています。また、地域や現場へ出向くことを重視し、月平均で約30回の地域・団体訪問、相談対応や研修の実施、話し合いや調査等の支援を実施しています。その中で様々な主体の横断・連携・協働を促し、いくつかの政策提言も行ってきました。スタッフ

もそれぞれの専門性を高めながら、関わる皆さんとともに成長してきました。現在ではセンターに関わる人たちは丹波市内外、多分野に広がっています。

一方で、コロナ禍もあり、来館者や利用が減る時期や地域では思うように活動が進まないことなど、課題もありました。

本特集では、12月17日に開催した3周年イベント「開設から3年を振り返り、これからの3年を話し合う会」で市民、自治会、自治協議会、市民活動団体、行政、市議などまさにセンターと関わる多種多様な人たちと「ごちゃまぜ」になって話し合った内容をもとに、これまでを振り返り、これからの3年を展望します。



丹波市市民活動支援センター
TAMBA CITY CIVIL AND COMMUNITY ACTIVITIES CENTER

Topics 01 それぞれが見た3年

3周年イベントには、自治協議会、自治会などの地域の方や市民活動団体、事業者、小学校、行政関係者など、多様な皆さんに参加いただきました。3年間の報告では、運営者からだけではなく、13人の参加者からそれぞれの立場・目線での報告がありました。参加者によって、利用の仕方や関わり方が異なるので、参加者同士で補い合いながら、3年を振り返り、これからについて話し合いました。参加者からの報告の一部を紹介します。※当日内容を編集して記載しています。



市民活動団体

NPO 法人たんばコミュニティハブ 理事長
岩間 里美 さん

地域猫、保護猫活動を実施しているが、3年前にはどうい
うことをやったらよいか、まとまっていなかった段階だった。
センターでは話を聞いてもらいながら活動を整理したり、
NPO のことも教えてもらい、結果として NPO 法人を立ち
上げ、一步を踏み出すことができた。センターがなければ
今のような活動にはなっていなかったと思う。現在でも遠方
からも相談者が来やすいということで、「お悩み相談会」
などで会議室を使っている。今後も、支援をお願いしたい。



地域自治組織

井原自治会 自治会長（山南町小川地域）
廣瀬 和政 さん

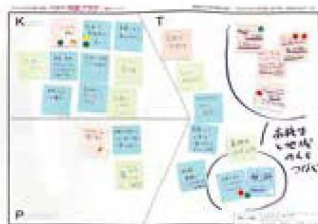
5 月までセンターのことを知らなかった。自治会は、人
口減少・少子高齢化によって、活動ができなくなり、再編が
喫緊の課題だった。10 年、20 年先まで考えた持続可能な
組織づくりを目指しているが、何をすればよいかわからなかつ
た。センターへ相談に訪れると、すぐに会議にも参加して
もらえ、客観的な視点で軌道修正や情報整理をしてくれ
た。支援のスタンスは「自治会が主体」でありながら、自
分たちだけではできないことをしてもらい、ありがたい。

Topics 02 成果・課題から次の3年で目指すこと

3周年イベントでは 54 人の参加者がごちゃまぜで 13 個のグループに分かれ、「Keep（良いこと・続けていくこと）」、「Problem（課題や改善が必要なこと）」、「Try（これから取り組んでいくこと）」の3つの視点で話し合いました。「講座や支援の質の高さ、相談のしやすさ、いろいろな人が集う場やつなぐ力の高さ、情報集積・発信量の多さ」などの良いことが挙げられた一方、「施設への入りにくさ」や「広報周知がさらに必要」「より多様な人たち、特に若い世代や高校生が関わられるようにしていく」などがこれからの課題として挙げられました。

これらの話し合いも踏まえて、次の3年間、主にセンターでは次のことを目指す姿として、取り組んでいきます。

- 社会教育・生涯学習の重要性を改めて広げ、学びが地域づくりにつながる循環が広がっていること
- 住民が主体となって、地域の将来を描き、自治会・自治協議会の見直しが進んでいること
- 行政・政策形成への市民参加・政策提言、行政内部や地域づくりの支援者の横断連携、地域との関わり合いの見直しが重点的に進んでいること
- 市民と活動、団体と団体、企業と団体・行政と・・・多様なマッチングで連携・協働による新たな市民活動・地域づくりが広がっていること
- 居心地のよい・入りやすい、より多くの市民が関わりやすいセンターになっていること
- より専門性が高く、親しみやすいスタッフに成長していること



ごちゃまぜで話した「これから目指すこと」

隣りの自治会

TONARI no
JICHIKYO san

佐治地域自治協議会

人が行き交い、交流が生まれるまち

佐治地域自治協議会（以下、自治協）は、青垣地域中央部の旧佐治小学校区に位置し、人口は約 2,000 人、約 830 世帯、22 自治会で構成されています。地域内には丹波市の支所や診療所があり、認定こども園や小・中学校、氷上西高等学校など教育施設が集まるエリアです。旧街道沿いには宿場町の趣が残り、佐治川を挟んで東西に水稻栽培を中心とした農村区域が広がる「まち」と「むら」が混在しているのが特徴です。今年、3 年ぶりに開催された「丹波八宿青垣の秋」（通称：八宿祭）のイベントでは、自治協を中心に、地域団体や商工会の有志が実行委員会を立ち上げ開催しました。宿場町の面影残る街並みと歴史を活かしたイベントは、地域外からも多くの人が訪れ、都市と佐治地域を行き来する、関わり続ける人々（関係人口）との交流につながっています。

組織連携で進める、暮らし続けられるまちづくり

自治協では、自治体や社会福祉協議会、ボランティアグループ、地域団体の方々などと連携して、地域課題の解決に取り組んでいます。その1つが地域福祉について考える協議体「SAJ ささえ愛い推進会議」です。2021 年には佐治地域在住の 20 歳以上の全住民を対象に「支え合う地域づくりアンケート」を実施しました。また、佐治倶楽部や関西大学佐治スタジオと一緒に取り組んでいるのが、『戦略的移住計画』です。佐治地域の 10 年先の未来を見据え、計画方針とアクションプランを策定しています。この計画の一環である「佐治青垣暮らしの案内所」は、現在 4 軒の空き家を案内所として活用し、地域の案内や空き家情報の発信を始めています。まだスタートしたばかりですが、ゆくゆくは上記の地域づくりアンケートから見えた将来的な暮らし支援や、佐治の強みである関係人口の増加などへ向けて、さらに連携を強めながら、暮らし続けやすい佐治地域づくりを進めていきます。



3 年ぶりの開催で多くの人が来場



アンケート結果をもとに取り組みを話し合う

丹波市民、学びの窓

地域の担い手としての『他出子』という存在

『他出子』という言葉をご存知でしょうか。

これは、進学・就職・結婚等を機に生まれ育った地元を離れ、別の地域で生活している人たちのことです。

近年では移住した定住人口だけではなく、地域の担い手として継続的に地域に関わる「関係人口」に着目した地域づくりが行われています。そして、地域の担い手をどう維持していくかという議論の中で、『他出子』の存在が注目されています。

特に丹波市のような中山間地域では、進学のタイミングで地元を離れそのまま戻ってこない若者が多く、人口減少の 1 つの要因となっています。しかし地元を離れて生活する

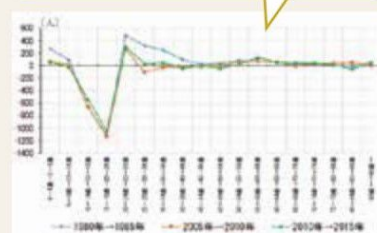
人の中にも、「これからも地元と関わっていききたい」「何かあれば戻ってきたい」と考える人は一定数存在します。そうした人たちに早い段階からアプローチし、関係性を築いていこうとする取り組みが丹波市でも進められています。

市では「丹波市ふるさと住民登録制度」を設け、丹波市に興味・関心を持つ他出子との接点としています。丹波市の情報を定期的に発信しているほか、地域の特産品を贈る「おかえり丹波ふるさと便」と題したキャンペーンの実施など、施策を行っています。

地域づくりにおいても、正月やお盆の時期や大型連休など、他出子の

帰省しやすいタイミングに合わせて行事を実施することで、他出子の地域活動への参加の機会を増やしていく工夫や、集落点検の手法を用いて他出子の実態把握が必要になってくるでしょう。「他出子も地域の一員である」という意識を皆で共有し受け入れる気持ちを持つことが、地域づくりのこれからを考えるうえでのヒントになるのではないのでしょうか。

※10 代後半から 20 代前半では、丹波市から転出する人が転入する人よりも多く、若い世代の人口減が目立つ



丹波市の流入による人口増減
出典：「第 2 期丹波市人口ビジョン」



繋ぐ! 市民活動

関西丹波市郷友会

関西在住の旧氷上郡出身者が創設した関西丹波市郷友会は、明治から123年の歴史を持ち、丹波市の発展を願う会員相互の親睦と、未来を担う子どもたちへの支援を目的に活動しています。会員から寄稿を集めた会報誌『たんば』の発刊、協賛企業や個人から集めた基金で青少年育成のための寄贈、会員の交流会を兼ねた年次総会を毎年行っています。

2016年以降は新しい役員を加え、多様な賛同者や会員を増やすことを目標としています。以前は会員を丹波市出身者から募っていましたが、丹波市に縁があり関心を持つ人なら誰でも入会できるようになりました。第10代会長の公江茂さんは

「多くの先輩方が積み重ねてこられた志をつないで次世代へバトンを渡していきたい。」と話しています。

今年度はホームページを作成し、活動内容を広く発信できるようになりました。今後はその内容をさらに充実させて、関連団体の交流を促せるよう工夫していきます。また来年度は、将来の丹波市を担う人材の発掘と継続的な支援を目的とした『わくわく大賞(仮称)』の開催を計画しています。この賞は主体的に活動する青少年を継続的に支援していくもので、会員の知恵と工夫を結集して企画することにより、関西丹波市郷友会のさらなる発展も目指しています。



支援団体の1つ丹波市少年少女合唱団による総会での演奏の様子



総会に参加した同会会員で記念撮影



活動事業者紹介

株式会社マイファーム (丹波市立農の学校 運営事業者)

株式会社マイファーム(以下、マイファーム)は京都市に本社を置き、「自産自消のできる社会」を目指して、「農業って楽しい!」を生み出し広げる事業に取り組んでいます。丹波市においては2019年4月に開校した「丹波市立農(みのり)の学校」(以下、農の学校)の指定管理者として学校運営と施設管理をしています。マイファームが運営する農の学校は、新規就農を目指す方が、年齢や経験の有無にかかわらず、有機無農薬栽培や丹波市の特産物の栽培技術、農業経営、農村文化を学ぶ全日制の農業学校です。長年地域で活躍されている農家から特産物栽培などを学ぶ「マスター農家研修」や、里地里山の豊かな地域資源を生かした「なりわい」を視察する「地域のなりわい講座」など、実践的な実習や視察研修が特徴です。

現在、第4期生が学んでおり、年齢層は20～50歳代と幅広く、近隣地域からの通学のほか、愛知県や東京都からの移住者もいます。これまでに43名が卒業し、丹波市内では24名が就農しました。市外での就農者もあり、卒業生全員がそれぞれの形で「農」に関わっています。運営スタッフの前田悟志さんは「卒業後の就農支援や販路拡大の相談対応など、卒業後のフォローアップにも力を入れていきたい」と今後の展望について語ります。現在、農の学校では第5期生を募集しています。

現在、第4期生が学んでおり、年齢層は20～50歳代と幅広く、近隣地域からの通学のほか、愛知県や東京都からの移住者もいます。これまでに43名が卒業し、丹波市内では24名が就農しました。市外での就農者もあり、卒業生全員がそれぞれの形で「農」に関わっています。運営スタッフの前田悟志さんは「卒業後の就農支援や販路拡大の相談対応など、卒業後のフォローアップにも力を入れていきたい」と今後の展望について語ります。現在、農の学校では第5期生を募集しています。



地元の方から学ぶ実習



第4期生の皆さん



丹波市市民活動支援センター

TAMBA CITY CIVIL AND COMMUNITY ACTIVITIES CENTER

〒669-3467 兵庫県丹波市氷上町本郷300 丹波ゆめタウン2階 丹波市市民プラザ内
TEL 0795-82-8683 MAIL ccac@tamba-plaza.jp

開館時間 10:00 - 18:00(会議室は 21:30 まで) / 毎週月曜日・年末年始休館

<https://www.tamba-plaza.jp/ccac/>

【情報誌へのご意見募集】

「たむたむ」についてみなさんからのご意見、ご要望をお待ちしています。役立つ情報紙と一緒に作っていきましょう。